みんなの童話

おじいさんのロッキングチェア

いそいで近よると、いすには子ねずみが6匹ねむっていた。
「このいす、ぼくのおじいさんのだぞ」
すると、ねずみの母さんがとび出してきて
「ごめんなさい、この子たちにひるねをさせていたのです」
「ぼくのおじいさんのいすだよ」
「はい、わかっています」
ねずみの母さんは、赤ちゃんねずみをいすからおろした。
けんちゃんは、ロッキングチェアの背もたれや、ひじかけを、やさしくさすった。
おじいさんとあそんだ日のことが、いっぱいうかんできた。
「あ、ぼくがかじったきずだ」
「あのー　こっちのきずは、私の子ねずみがかじったものです。ごめんね。でも、いすの足のここのひびわれは・・・」
「それはね、それはね」
けんちゃんははげしくいった。
「ぼくが、ぼくがこわしたんだ」
去年の秋、けんちゃんと兄ちゃんは、おじいさんのロッキングチェアのとりあいでけんかになった。
「じゃんけんにしようよ」
と、いう兄ちゃんをつきたおし、ロッキングチェアを両手でおもいきりたおした。
そのとたん、ロッキングチェアは、えんがわからふみ石にあたって庭に落ちた。
いすの足は大きくひびわれてしまった。
兄ちゃんの頭にもこぶができた。
「わしも子どものころは、ようおこったり、けんかもしたなあ。だけど人をきずつけたり、らんぼうはいかんぞ、なあけんちゃん！兄ちゃんにあやまったか、仲ようせんとな」
おじいさんの言葉を、けんちゃんは決してわすれてはいなかった。そして、やさしく肩をだいてくれたことも。
「ねえ、どうしてぼくのことを知ってるの？」
すると、ねずみの母さんは、
「私は、母屋の天井うらに住んでいました。だからけんちゃんやお兄ちゃんのことも知っています。おじいさんのやさしい子守歌もおぼえました。ロッキングチェアが物置小屋にしまわれたのを知ってここに移ってきたのです。
このいすは、私にとっても、おじいさんへの思い出のつまったものです」
（みんな、おじいさんがすきだったんだ）
けんちゃんは、ひびのはいったいすの足を気づかいながら、目をとじて、やさしくゆらしてみた。
「さっきはごめんね。つぎに赤ちゃんねずみにかわってあげるよ」
「まあ！ありがとう。ありがとう」
ねずみの母さんは、お礼をいいおじいさんの作った子守歌を歌いはじめた。
ねむれねむれ　いとし子よ
ねむれねむれ　すこやかに
ねむれねむれ　ゆめのくに
いつのまにか子守歌は、おじいさんの声にかわっていた。
けんちゃんはおじいさんにだかれ、胸に顔をうずめてゆれていた。
「けんちゃん、けんちゃん」
遠くでさけんでいる声がした。
（そうだ、ぼくかくれんぼしてたんだ。おじいさんのいすでねむってしまったんだ）
けんちゃんは、あわててとび出した。
「みんな、ごめんね、ぼくのこと心配してくれて。またあしたあそぼうね」
友達は手をふり帰っていった。
けんちゃんは物置小屋へ走った。そして、戸を開けた。ロッキングチェアは、夕ぐれの中で、ぼんやりとしか見えなかった。
しろやま会員　やのかづこ

「もういいかい」
「まあだだょー」
きょうも、けんちゃんの家の庭は、友達の元気な声でにぎやかだった。
「もういいよー」
けんちゃんは全速力で、うらの物置小屋の前まで走っていった。
すると、きいたことのある歌が中からかすかにきこえた気がした。
そっと戸をあけた。日の光が小屋の中にさしこんだ。
（あ、おじいさんのロッキングチェアだ）
この春、亡くなったおじいさんのいすが目にはいった。
（こんなところにしまわれていたんだ）